

男子部・女子部

平和週間

2016 年から続けてきた平和週間は、2023 年度はすべての運営を生徒が行った。ここ数年、徐々に運営全体を生徒が担い、教師は後方支援に回る態勢をとってきた。毎年の様子を見てきた中、主体性が育ち、責任をもって運営を担う生徒の様子から、今年度からは準備段階からすべて生徒が企画・運営を担う形に移行し、教師は見守る形をとった。係の生徒に感謝と敬意を表したい。運営の中心にあった二人の生徒が以下を執筆した。(更科 幸一)

高波碧 入海沢音

2023 年 9 月 20 日～22 日の 3 日間に渡り、男女両部の生徒を対象として平和週間が催された。今年度は各日ごとに大題を掲げ、それに沿って講演者を招く企画を行った。1 日目の大題は「自由」、講演者は大澤真幸氏を招聘した。二日目の大題は「尊重」、講演者は咲花昭嗣氏を招聘した。三日目の大題は「フードロス」、講演者は松尾粒一氏を招聘した。

「平和」の実現へ。

あるいは水平線へと向かうはてしない歩み。

「平和」という抽象的で漠とした言葉を何らかの理想として掲げようとする姿勢は、いつの時代もシニシストから(そうでなくとも、習慣の型に馴致された日常性のみが現実的なのだと主張する多くの人々から)懐疑のまなざしを向けられてきたように思われる。

ただし、そうした人々の意識が——あるいは無意識が——まったくの筋違いであるということではできない。事実、一つの理想を追い求めて歴史の中に生起してきた多くの社会運動なり革命運動はそれが人々の真正にして切実な心情を拠点として展開する時でさえも、ひとたびの高揚感と熱狂が過ぎ去った後にはその上に相克と抑圧を織りなす権力の装置へとグロテスクに凝固していかざるをえなかったのであるし、そのような社会の構造は人間の自由な意志と想像力とがその中で自らを裏切ってしまうような軌道をさえ描かせしめる磁場を形成しているからである。

「自由」や「平等」や「平和」といった小綺麗な理想など観念の中の虚像にすぎないのではないのか？ 訝しげな表情で「平和」という言葉の疑わしさ、ありそうもなさ、具体性のなさ、非現実性を鋭く見抜き、これを^{ひんしゆく}響響する人々の五感

はある意味で正しくもある。「平和」とは暴力や抑圧などといった遍在する悲劇の彼方に投射される対-表象なのであって、そうである以上は構造論的に決して実現しえないものであるからだ。まず私たちは、そのことを自己欺瞞なしの明晰さで直視しなくてはならない。平和とは「実現しえない何か」の別名である。そして、その上でなおも論点はポジティブに転回しようと私は考えている。

平和の実現に向けた努力は水平線に向かって歩くということに比定しうる。球状のこの星の上で水平線に向かって歩いたとしても、それはあたかも逃げ水のごとく無限に遠ざかり私たちはそこへ到達することがない。けれども、その方向に向かって歩いているということは分かる。その歩みの中で、自分と同じように水平線の果てに憧憬を抱く同士に出会うかもしれない。そこでの出会いが、そして響き合いながら共に前進するその歩調が私たち自身を励ます。平和とは、構造論的に決して実現しえないものであり、決して到達できないものであるが、そうであればこそ、私たちはそこへ向かって無限に近づいていくことができるのである。

今年度の平和週間をふり返って、あらためてその高密度な一日一日が、疲弊を伴いつつも私たちを新しく前進させてくれるものだったと感じている。事務方の仕事に奔走す

る傍らにあっても、そのことはしっかりと頭の片隅にあった。

今年度は新しい系のメンバーを多く迎えたこともあり(系の人数は過去最多だった)、露払いのない中でスタートを切った平和週間だったが、各人の温度差を越えて「このままではいけないはず」という気概は分かち合われていたように感じる。瑣末なことに言及すれば決して万事満帆であったとは言い難い三日間であったが、今年度のさまざまな挫折や葛藤や迷走もふくめ、この体験がいつそう豊饒化された生徒一人一人の感性の中に染み込んで新たな前進の一步へと結晶する日を待ち望みたい。

「平和」は常にはるか彼方にある。その意味で、平和は人の意志に反して到来するものである。たしかなことは一つ。この星の上に暴力や抑圧や不幸がある限り、平和への意志と希望は尽きることなく充溢し続けるのである。

1 日目「自由」

講演者 大澤真幸氏

1 日目となる 9 月 20 日は社会学者である大澤真幸氏を招聘し、「自由」という大題のもとで講演を行っていただいた。冒頭、大澤氏は「自由」という理念の普遍性を示した歴史的ドキュメントとしての冷戦に言及、「自由」を蔑ろにする人々の辿ってきた悲惨な歴史の典型例こそが二つの世界大戦であり、冷戦の構造であったと喝破した。

しかし、その上で大澤氏は「自由」の只中に生きること、自分の手で自分の生を切り拓いてかなくてはならないということの困難と呻吟をミヒャエル・エンデの『自由の牢獄』、ウィリアム・スタイロンの『ソフィーの選択』、倫理学の斯界を越えてすっかり周知のものとなった「トロツキ問題」などを例にお話してくださった。

40分にも及んだ質疑では、大澤氏の趣味から制服のルールにおける「自由」のあり方について、また「自由」という理想を念頭においたときに見えてくる寮生活の問題について、目下で進行中の共学化をめぐる生徒一人一人の「自由」な発言や「自由」な議論はどこまで尊重されるべきかなど多彩な問いが飛び交った。

講演の最後、大澤氏は日本独自の権力構造である「空気の支配」に言及し、一人一人が空気の支配からいかに自由であるかということに、21世紀の命運が託されていると述べられた。

2 日目「尊重」

講演者 咲花昭嗣氏

2 日目のテーマは「尊重」とし、自由学園最高学部の咲花昭嗣先生にお話を伺った。講演3日前に例年平和週間の会場であった記念講堂が使用できないことが発覚し、急遽旧男子部体育館と羽仁吉一先生記念ホールの2ヶ所を配信で繋いでの開催となった。「尊重」というテーマ設定の背景には、共学化を目前に控えている中で学園生が互いを認め合い、一つの平和な社会を創り上げていくための力を得たいという系の思いがあった。

咲花先生はマイノリティとマジョリティという視点から自己・他者を尊重するためのヒントを下された。講演は地方から生徒が集まっている自由学園だからこそ身近である“方言”という切り口で個々のアイデンティティについてのお話から始まった。また女子部男子部がそれぞれで持つ言葉や文化に触れながら、共学化していく際にどちらかがどちらかを飲み込むのではなく、新しい共通言語を作り出していくことが必要であると述べられた。

さらに、「分類する」ということについて話題にあげ、何かを分類することによってそこに差別が生まれる可能性や序列がつく可能性があるとお話してくださった。

前述の通り、互いを“認め合う”ことができればという思いでテーマを設定した。しかし講演の中で、相手を認めるという言葉も(優しさから出た言葉だとしても)相手を差別し下にみていると取られかねず、時に小さな暴力になりうることに気付かされた。気付かぬうちに自分と他者を分類していた為に、「認める」という言葉が出てきたのだ。

自分の居場所を確保するために何かを・誰かを分類し否定するのではなく、新しい共通言語を生み出すことで互いの居場所をつくる。尊重とはこうした営みのことを指すのかもしれない。大変革を迎える女子部男子部にとって示唆に富んだ時間であった。

3 日目「フードロス」

講演者 松尾粒一氏

最終日となる9月22日は、NPO 法人フードバンク関西の副理事を務める松尾粒一氏を招聘し、「フードロスを無くそう」という講題のもと講演が行われた。

講演の前半部では松尾氏の活動の紹介も兼ねて、フードロスをめぐる世界の現状が問題として提起された後、「自由

学園のフードロス減らすにはどうすればよいか」というテーマで生徒たちがディスカッションを行った。講演の後半部では、質疑も兼ねて実際に出了アイデアを松尾氏に披露し意見を仰いだ。「メニューを生徒一人一人にあったものに束える」、「食糧部の受注システムに束革を」など現実の問題を鋭く指摘する意見から、「自治区域の担当場所にあ

まりものを束べる係を追加する」といった、ユニークな意見も見られた。

実際、男子部では平和週間に先立って中等科の一部生徒を中心としてフードロスへの関心が高まっていたこともあり、自分たちの暮らしを深く吟味する刺激と触発に満ちた時間になったと感じている。